

人口社会増達成の島を訪ねて

〔島根県知夫里島〕

本誌編集部



離島留學生が生活する「はぐくみ寮」。

人口増で注目の島

隠岐にある有人島は四島。その最南端、人口が最も少ない島が知夫里島^{ちりしま}である。行政区は一島一村の知夫村。六三四人（二〇二〇年国勢調査）が暮らすこの島が全国的に注目を浴びたのは二〇一九年のこと。全国一七四一自治体で人口増加率が一位となった。しかも、一六年から二〇年まで五年連続で社会増（転入者数が転出者数を上回る）を達成していた。知夫里島で何が起きているのか、現地を訪ねた。



島留学——島暮らしを全力サポート

村立知夫小中学校（全校児童生徒三二名）では、二〇一七年度より小学五年

（中学三年の離島留學生を受け入れている。これまでの六カ年で延べ二二人（県内三人、県外一人）、現在は六人が村が整備した寄宿舎「はぐくみ寮」で暮らす。島前三町村はいずれも小中学生の離島留学制度を設けているが、海士町と西ノ島町は親が子をとらなつて移住して通学する「親子型」で、寮を整備しているのは知夫村だけである。児童生徒は住民票を村に移して、寮から学校に通う。

村教育委員会は、知夫小中学校と同じ建物に事務所を構えており、学校授業のサポートも担う教育魅力化コードエネーターを配置するなど、寮生活を含め留学制度をサポートをする体制が整っている。安藤晋治教育次長は「特別なプログラムは設けていません。島



知夫村教育委員会の安藤晋治教育次長。

での日常を大切に生徒が過ごせるようサポートしています」と話す。コーディネートの一環としての竹村ふみさんは「島留学生との関わりは、島生まれの子にとって新しい体験です。戸惑いもあるでしょうが、成長につながるはず。島留学生のサポートには私たちだけではなく、村全体、島前全体で関わるのが重要だと思っています」と語る。

寮生活は「ハウスマスター」が支援する。寮での夕食時には子どもたちと一緒に卓を囲むほか、学校と島外の保護者との連絡役もつとめるなど、親元を離れて暮らす子どもたちの様子にも気を配る。現在、ハウスマスターは四人の交代制、総務省の地域おこし協力隊制度（以下、協力隊）を活用して人材を確保している。なお、寮の食事づくりは地元産品なども使って、八人の調理員が交代で担当している。

島留学生OBの中には、隠岐島前高校（海士町）に進学した生徒もおり、休みを利用して「ふるさと」である知夫に遊びに帰って来ることもあるという。「隠岐島前高校とも連携して、島前全体で子どもを育てる仕組みを大切にしていきたい」と、安藤次長は展望を語ってくれた。

大人の島留学——島前全体で開始

海士町で二〇二〇年から協力隊を活

用した就労型お試し移住制度「大人の島留学」が始まったことは本誌二六八号（海士町のいま）で報告したとおり。この動きを島前全体に広げて、知夫村でも二二年度に始まり、現在は六人の「大人の島留学生」が観光、教育、行政（産業・福祉）の各分野で業務に取り組んでいる。一年間の「島留学生」と三カ月間の「島体験生」があり、今年度は島前全体で前者が三〇人、後者が八〇人（二〇人×四シーズン）ほど活動するという。

知夫村で「還流コーディネート」として大人の島留学をとりまとめている猪原聖（ひし）さんは、事業を実施・運営する（一財）島前ふるさと魅力化財団の職員。自身も島根大学大学院在学中の二〇二一年に島体験生として海士町に着任し、岩ガキの短期バイトなどを経験した。

その体験も踏まえ、「島への人の出入りが当たり前となって、住民や事業者



還流コーディネーターの猪原 聖さん。

など受け入れる側に変化を起こしたい。特別なスキルや思いがなくても、島で暮らしている。誰でも気軽に島で暮らすことを選択できるようにする」と、地縁・血縁のない移住者が生き生きと島で暮らしていくための、受け入れ側の姿勢の重要性を語る。

なお、二三年度は留学生五〇人、体験生九〇人が活動する予定だという。

さらに島前地域には多様な人が行き交い、新たな風が吹き込まれ続けていく。

島守ちぶり——港の何でも屋

島の玄関口、来居港（くいき）の客船ターミナル一階には、知夫里島観光協会（小西秀人事務局長）とともに合同会社「島守ちぶり」が事務所を構える。

同社は二〇一八年一〇月に設立。隠岐汽船の綱取放（つなとりはな）（船が岸壁に離着岸するときの綱を解いたり係留する作業）をはじめ、

荷物配達、レンタカーなどの業務を担っている。波風の影響で船が抜港した際には、村が所有する「高速艇知夫」で、荷物と乗客を隣島から運ぶこともある。また、冬季以外は隠岐汽船が午前中のみの寄港となるため、まとまって空いた午後の時間を利用して、便利屋（何でも屋）として、墓や空き家の管理、草刈りなどの依頼に応えている。会社の設立にあたっては、財源として地方創生推進交付金を活用、隠岐汽船が



島守ちぶりの油井直也さん。

一五〇〇万円、知夫村が五〇〇万円を出資した。

社員の油井直也（あぶらい）さんは大阪出身。同社が設立した当初から在籍する唯一のメンバーである。高校進学にあたり、知人から隠岐島前高校を勧められ、離島留学した。三年間を海士町で過ごしたのち、大学進学が決まっていたが、知り合いの知夫村役場の職員から誘われ、



二〇一七年に移住、現在は島北西部の古海地区に住んでいる。油井さんは「よく来たね、と温かく迎え入れてくれた」と、移住当時は振り返る。海士町よりもさらに人口の少ない知夫村、そのなかでも特に高齢者の多い古海地区で、孫のような存在として可愛がられているという。「若い人が個性を生かして活躍できる島であってほしい」と今後への思いを口にする。

文字通り「島の暮らしを守るため」、島になくはならない島守ちぶり。現在は、奥田良樹代表社員のもと、協力隊や集落支援員など移住者の働き場ともなっている。他の小規模自治体にとっても参考となる仕組みだろう。

古民家レストラン——協力隊が開業

知夫里島の農業はほとんどが畜産業で、島の三分の一ほどの広大な面積が放牧地となっている。畜産に、漁業や宿泊業など複数の仕事を組み合わせて

生計を立てている人も少なくない。

一方で、野菜を育てる農家は岡田紗和さん一人だけ。彼女は、二〇二一年に島に移住した現役協力隊員で、兵庫県丹波篠山の出身だ。島に来る前は、岡山県でワイン用のブドウづくりを経験していたものの、本格的に農業に取り組んだのは知夫が初めてだという。自家農園「TADAKI FARM」で少量多品目の作物を栽培し、島内の商店や飲食店に販売している。また、養鶏、トマトソースやミカンジャムなどの加工品づくりも手掛けている。

協力隊二年目の二二年度、岡田さんは個人事業主として「委託型」で活動をしている。昨年一〇月、彼女より一年早く島に移住したホテル「知夫の里」で料理人として働いていた里野モミイチさんとレストラン「Chez SAWA」をオープンさせた。自家農園の作物や鶏卵、島の水産資源を利用した食事で、「規格にしがらみならず、あるものを生か



古民家レストラン「Chez SAWA」の内観。

「知夫はやりたいたいことがあって、それを実現する場所として最適です。自分たちが楽しむことを大切にしています。今後、納屋を改装して泊まれる場所も

整備したいです」

これまで島になかった形のレストランは、開店以来、地元の方々も数多く利用してくれているとのこと。子どもたち向けの食事マナー教室などを計画するなど、今後の展開が楽しみだ。

新しい民泊——移住者の相談場所にも

二〇二二年二月に島南東の薄毛^{うすげ}地区で自宅を新築した民泊「小新家^{こしんや}本店」をオープンした小新高可^{なかなし}さん、和美さん夫妻。一棟貸し切り（定員一名）の「プライベート空間 壹番館」と食事処「創作家庭料理のお店 おっかささん」を併設している。開業にあたって、建物の新

設には知夫村産業振興担い手支援事業補助金制度を活用した。

島出身の高可さんと大阪出身の和美さんは、二人の子どもと大阪で生活していたが、子育て環境を理由に、二〇〇〇年に家族四人で知夫へ移住。二〇一九年には和美さんの父親を介護を理由に島へ呼び寄せた。一般ゴミ収集の仕事を中心として、畜産にも取り組んできた。四人の子ども全員が島を離れたタイミングで宿泊事業を始め、忙しい日々を送っている。「食事処は現在のところ宿泊のお客様がメインで、会食は完全予約制にしています。宿泊客と地元の人との接点となる場所にしていきます」と和美さん。夕食と朝食には、日野昇さん（サンライズカンパニー）の平飼いの「岡崎おうはん」の鶏卵や採れたて野菜、果実など島の産品を活用している。

取材日、ゲストハウスの運営を夢に持つ成澤大悟さんが「サービスの提供



方法などの勉強をしたい」と、食事処と民泊を利用していった。成澤さんは、長野県浅科村（現佐久市）出身。軽井沢のホテル勤務や石川県七尾などでの生活を経て、一月に大人の島留学生の

山本英里さんに誘われ、漁師を目指す友人と来島、「地域おこし協力隊インターン」制度を活用してホテル「知夫の里」に勤務している。インターン制度は二〇二一年度到新設された仕組みで、最長三カ年の「地域おこし協力隊」への参加をインターン体験を通して検討できる。移住者と地域のミスマッチの解消のためにも、積極的に活用してほしい制度である。なお、成澤さんは引き続き、島で生活していくという。



二〇二一年には協同組合YADDO（ヤドド）知夫里島特定地域づくり事業協同組合が創設された。嘉見和生（かみわお）さんは、和歌山県から母の地元である知夫に二〇年に移住、協同組合職員として海藻の加工や島内交通を担う（一社）ぐるーり知夫里島での勤務を経て、現在は前述の島守ちぶりで働いている。

地域おこし協力隊や集落支援員など、新たな担い手を呼び込み地域力の充実を図る制度の積極的な活用とともに、島に来た人びとを受け入れ支える素地が整っているからこそ、いったん島と関係を持った人びとが生き生きと生活が続けていけるのだろう。実際に今回、島内各地で協力隊員や「大人の島留学生」が活躍している様子をうかがうことができた。村地域振興課の浜本洋平さんによれば、牛の畜産や岩ガキの養殖など、地元の第一次産業従事者に教える請う形で移住し、生計を立てていく方もおられるという。

勤務先だけでなく、集落、島、ひいては島前地域全体で移住者を支えていく体制づくりを目的の当たりにし、知夫村の人口増は一過性のものではない、との思いを強くした。

（文・佐伯／写真・小原佐和子）
（本号グラビアもあわせてお読みください）